

6年制教育における長期実務実習のための教育体制の構築—大学附属病院における薬学部教員と薬剤部薬剤師のコラボレーション—

○久保田 理恵^{1,2}, 市原 久雄^{1,2}, 青木 学^{1,2}, 田中 庸一^{1,2}, 渋谷 清², 小此木 佳子², 柴崎 淳², 横田 訓男², 小宮山 貴子^{1,2} (¹北里大薬・臨床薬学, ²北里大北里研メディカルセンター病院薬)

【目的】薬学教育6年制では、平成22年度より5年生の長期実務実習がスタートする。北里大学は4つの附属病院を有しており、薬学生はいずれかの病院で2.5か月の病院実習を行う予定である。北里研究所メディカルセンター病院では、今年度新たに3名の薬学部教員が薬剤部薬剤師を兼務することとなり、現場の薬剤師と共に学生の実務実習指導を担当し、教育を充実していくことになった。今年度実施された早期体験学習や実務実習では、長期実務実習を見据えながら、教員と現場の薬剤師がそれぞれ役割を分担し、実習指導に当たった。両者のコラボレーションの有用性や不都合があった点、今後の改善点を考察した。

【方法】平成20年度は旧カリキュラム4年生の4週間病院実習と、1年生の早期体験学習や3年生の中期モチベーション学習としての見学実習、ならびに大学院生の臨床研修が実施された。いずれも薬学部教員が実習をコーディネートし、教員と現場の薬剤師が指導を分担した。特に大学院生の臨床研修では、従来の指導方法を変更し、教員が主体となって現場の薬剤師と連携しながら指導を行った。教員着任前後の状況を比較すると共に、年度の実習がすべて終了した時点で教員および現場の薬剤師にアンケートを実施して、指導体制のあり方を評価した。

【結果・考察】これまで現場の薬剤師が中心となって学生に実務実習を指導してきたが、薬学部教員が参加することにより、薬剤師の意識に変化をもたらした。また薬剤師は指導内容や責任分担の境界が把握できず惑う部分もあった。長期実務実習では、患者のベッドサイドでの実習を充実させていくことが必須であり、大学院生の臨床研修を土台に、教員と薬剤師が一層の協力体制を確立し、薬剤師業務の充実と共に、教育指導体制を整備していく必要がある。